

心理的距離の動態

山根 一郎*

Dynamics of Psychological Distance

Ichiro YAMANE

1. 問題

1.1. 心理的距離モデルで語られていない問題

山根による「心理的距離モデル」(以下、当該モデルを指すことが明瞭な場合は「当モデル」と略記)は、自己と他者間の心理的距離を、対人関係を構成する1変数というより、対人関係そのものの本質的現象であると見なしている。

そしてその本質に接近するため、心理学的体験次元の基盤を掘り起こして、体験の根拠としての現象学的・存在論的に遡及する方向で探求された(山根, 2005)。しかしその方向での探求であるがゆえ、測定のための尺度化はもとより、いわゆる心理学的“モデル”としては、要素の附置という粗描段階のまま放置されていた。2012年になって、存在論的構造の可視化としての存在者的把握への転換として、ただし真の値の測定を志向しない形ばかりの“定量化”に陥らないため、まずは(心理的)“距離”概念の厳密化をめざして数学的距離との照合を試みた。その際、当モデルにおける「個性・共同性」という心理的距離体験を構成する存在論的次元と、体験する場としての「能動・受動」の方向および「表象・表出」の体験層という存在者的次元(図1)との関連性が論じられ、ようやく心理学的モデル化への端緒が開かれた(山根, 2012)。

一般的に、理論モデルが現象の機序を生き生きと説明するためには、静的な構造のみでは不十分であり、さまざまな動態をシミュレートできるシステムとして構築すべきである。ところが当モデルをシステム化するには、重要な問題が手つかずであった。それは、距離(心理的距離であることが明瞭と思われる場合は以後も「距離」と略記する)が変化するメカニズムである。

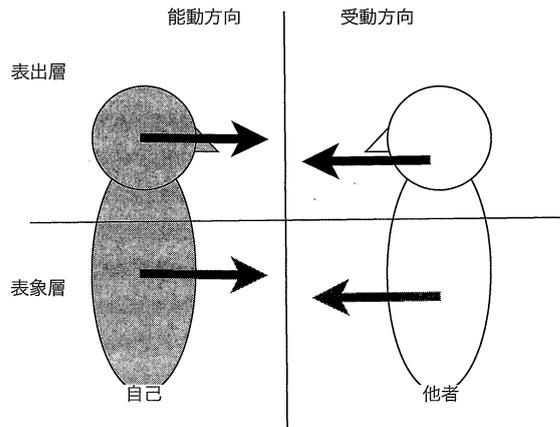


図1 心理的距離の体験構造

*心理学科 教授

当モデルでは任意の距離が前提として与えられ、体験層と距離方向の間でのそれらの不一致だけが問題化されてきた。すなわち、距離の変化を、ズレ・ミゾ・不整合など、既存の要素間の不一致の調整という側面では説明しておらず、たとえば特定の他者と（意気投合して）距離が一方向的・加速度的に接近していくような現実に頻発する現象はまったく考慮されてこなかった。

1.2. 心理的距離における力

心理的距離の非調整的な変化を考慮するには、当モデル内の特定の距離を単独に変動させる“力”とその原因を考える必要がある。すなわち、モデルに“力学”を導入する必要がある。

a) Lewin の力学モデル

心理学において自覚的に「力学」を導入したのは K.Lewin である。Lewin (1936) によれば、力学的概念とは変化の原因・傾向や均衡・力・緊張などの現象を記述するもので、それによって数学的記述が可能になるという。ただし心理学的力を物理学的力と同一の概念とする必要はなく、あくまで心理学的概念としての適性の範囲内で使用される。Lewin が導入した力学の基本概念を簡単に説明する。

① 力と距離

Lewin によれば、心理学的力とは「変化の原因として仮定されている力学的事実」(1938)、「生活空間の一定点における、変化の傾向と方向と強さ」(1951)であって、「方向性」と「強さ」の2属性をもつベクトルである (Lewin, 1938では他に「作用点」も想定されている)。方向性とは生活空間内の特定領域がもつ正・負の誘意性 (後述) であり、力の強さ (F) は、その領域までの生活空間内の距離 (D) とその誘意性 (V) との関数である (原典の表記を簡明にして次式に示す)。

$$F=f(D \cdot V)$$

すなわち、誘意性が強いほど、あるいは誘意性の発生領域に心理的に“近い”ほど力は強くなる。また方向が正反対で強さが等しい力の場合は葛藤となる。

Lewin にとっての (心理的) 距離とは、生活空間内の自己の位置から目標となる領域までのトポロジック距離である。そして上の式によって、領域に向かう力の強さは、心理的距離と誘意性の強さによって決まる。目標までの距離は、物理的 (空間的, 時間的) 移動だけでなく、心理的な障壁の数によっても決まる。

② 誘意性 (valence)

Lewin(1938)によれば、誘意性とは、生活空間の1領域が個体を誘引/反発する性質であり、スカラー量であって、力 (ベクトル) そのものではないという。力は目標と個体との位置関係に依存し、一般に、誘引する領域に接近するほど強くなる。生活空間内の自己は、ただ1つの領域への力だけでなく、さまざまな領域から発せられる複数の力を受け、実際なされる生活空間内の移動は力の全体 (合力) によって決まる。

b) 心理的距離における力

次に、心理的距離モデルにおける心理的距離の移動 (変化) をもたらす「力」を想定してみる。当モデルにおける心理的距離空間は、自己と他者との心理的 (より深くは存在論的) 間隙性であって、両者の間に拡がる2次元以上の空間的な「場」は想定されていない。従って、距離の移動は距離の両端にあって距離を構成する自己と他者のみがかかわり、移動する力が作用するのは移動主体である自己か他者のみである。すなわち、当モデルはどちらかという場の理論

と対立する要素主義であり、自己と他者の間の「場」が自他の距離を変化させるとは考えない（そのような現象を否定するものではないが、モデルには含まれない）。その点で、当モデルにおける力は、Lewinの「力」とは異なり、むしろ「誘意性」に近い。また方向性は、対象方向への接近と後退の相反する二方向のみなので、場の力と異なり1次元である。

そもそも「力」とは「仕事」をする能力である。心理的「仕事量」はLewin的には生活空間内の移動を意味しようが、心理的距離の移動を仕事とすると、仕事量は距離の関数であるから（他者が固定されている場合、誘意性は定数とみてよい）、距離の移動が大きいほど力を要することになる。このようにLewinにおける力は、移動に要した距離によって測られるものだが、心理的距離において同定したい力は、移動させる原動力としての力である。

以上の概観から、Lewinの力学は、当モデルにおける心理的距離の移動という現象を説明するものではないといえる。

2. 構造的力

本稿の主題である心理的距離の動態を論じる前に、すでに当モデルで言及されている距離の移動現象を力学的に説明しなおしてみる。

2.1. 均衡への力

Lewinの力学モデルは、均衡の破れである非均衡状態が場の緊張をもたらし、それが動因となって緊張解消行動を導くことを仮定している。彼の後継者ともいえるF.Heiderの「バランス理論」やL.Festingerの「認知的不協和理論」などはいずれもこのモデルの応用である。

実は「心理的距離モデル」においてもこの力学的均衡モデルが取り入れられている。すなわち、ズレやミゾ、不整合という距離の不一致が力学的な非均衡に相当し、距離の一致という均衡化の動因が仮定されている。これは、能動／受動の2方向、表象／表出の2層の計4領域からなる体験「場」が想定されていることになる。当モデルにおける心理的距離の不一致現象をあらためて説明する。

a) ズレ

表象距離と表出距離間の差である「ズレ」には、能動方向と受動方向の2種類がある（図2）。能動方向でのズレが発生するのは、対人関係を維持するために、表出の制御が必要となるからである。しかしズレの放置は自己表現上の欺瞞として不快であり、相手に誤解を与えることにもなる。そのためズレに低減の圧力がかかる。

受動方向においては、受動表出から受動表象が推定されるという一方向的関係になっている。そのため受動方向でのズレは起こりにくいが、以前の対面で推定された受動表象と今回得た受動表出との不一致は、推定の確信に混乱を与える。そこでは不一致を低減する方向での解釈がなされよう。

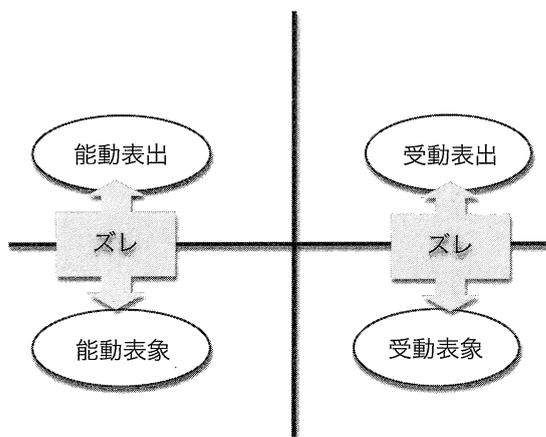


図2 心理的距離のズレ

b) ミゾ

能動距離と受動距離間の差であるミゾには、表出層と表象層の2種類がある(図3)。ミゾの低減圧力は、社会的要請(規範)と心理的要請(快)とによる。

表象層のミゾは、相異なる自我間の現象として本来的に発生を防止できない。ただし後述するように距離の一致が社会的に要請されない公的間柄の場合、ミゾは不快でなく、一致への圧力は発生しない。一般に許容範囲内のミゾは低減されないが、許容範囲外のミゾは少なくとも一方の関係維持力を喪失させる。

表出層のミゾは、合せたフリをすることによって表向き解決されるが、ズレが発生することになり、次の不整合状態を招く。

c) 不整合

能動表象と受動表出の不一致である不整合は、ミゾとズレの合成であるため、ミゾの解消(ズレが残る)とズレの解消(ミゾが残る)のジレンマとして体験される(図4)。日常的に体験する対人ストレスはこの不整合であることが多い。

2.2. 均衡力の応用

以上のように当モデルで想定されている静的均衡力は、単純に距離を接近しようとする力ではなく、不一致を解消し、均衡を保とうとするものであるため、接近にも後退にも作用する。この力だけを考えるなら、以下のような手の込んだ調整行動が可能である。

a) 接近を引き出す後退

相手に強いミゾを体験させることによって、相手側の接近行動を誘発できる場合がある。すなわち、あえて能動的に後退し、現在の均衡状態からは遠くなってしまった距離(ミゾ)を相手に体験させる。すると相手はそのミゾを埋めようと、距離を接近させる。相手にとっては、不均衡な受動的後退を体験した場合、均衡に達しようと能動的接近が動因づけられるのである。このパターンは「押してダメなら引いてみる」という恋愛上の駆け引きに使われる。

b) 後退を招く接近

上とは逆に、能動的接近をした後、期待に反して受動的後退を招いてしまう場合がある。それは相手側にとっては、不均衡な受動的接近(強いミゾ)を体験した場合で、均衡の復元とし

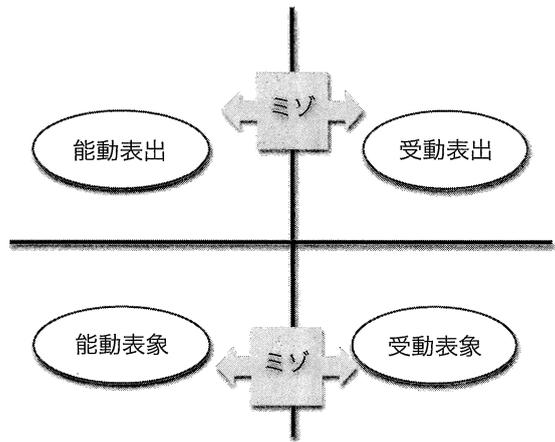


図3 心理的距離のミゾ

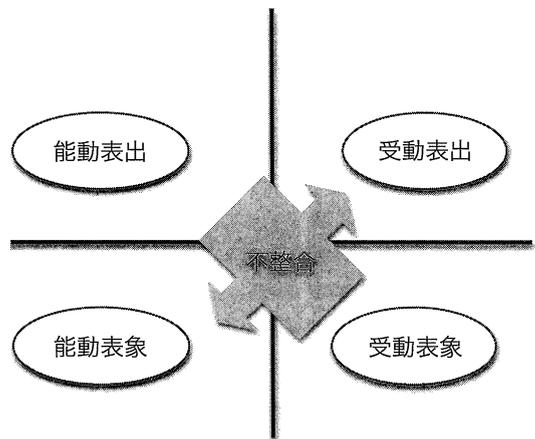


図4 心理的距離の不整合

ての相手側の後退を期待する。その後退を引き出すため、相手から後退したのである。その結果、最初の接近は無に帰せられ、既存の距離へ収斂していく。

c) 不一致が容認される場合

ミゾやズレには無条件に一致への圧力がかかるわけではない。ズレが容認されるのは、特定の表出が要請される場合、すなわち演技が要請される場合がある。舞台上の演技だけでなく、接客業などの職務上の演技が要請される場合も、ズレていても一致への圧力がかからない。ミゾが容認されるのは、ミゾを前提とする間柄である場合がある。「教師と生徒」・「親と子」のように、多くの公的間柄では能動・受動間の距離の一致は前提とされない。ミゾが容認されにくいのは、「友人」・「恋人」など一定以上の心理的距離の近さによって成立する私的間柄においてである。

2.3. 力の源泉

一致への力を発生させるのは4つの距離の間の差異である。すなわち距離間の差という勾配が力を発生させる。従って、力の方向は距離の勾配の方向によって決まる。力の強さも勾配の大きさによって決まる傾向にあるが、勾配が許容範囲を超えると、均衡への動因を失い、関係が破綻する。

2.4. 均衡モデルの限界

当モデルは、なんらかの理由で均衡がくずれたズレ・ミゾ・不整合状態を所与としており、その状態の発生原因については何も語ってこなかった。そして所与の均衡からの逸脱における修正機能を論じただけで、均衡化した後は変化が仮定されない。また、距離を構造的に安定化しようとする動因のみが仮定され、能動表象自体が非関係的に単独で変化する場合や現在の安定状態を打破しようとする動因は仮定されない。そのため、新しい距離関係へ進展するという対人関係上の当然の事実を説明できない。ここに当モデルの重大な欠陥がある。

均衡を破る一方的な接近現象が現実の対人関係にみられるならば、モデルに含まれていない別の力が働いている事になる。それを考慮に入れなくてはならない。

3. 引力と斥力

真他人（アカの他人）同士は、心理的距離上では互いに“無限遠”として均衡しているため、上述した均衡モデルでは彼らは一方向に仲良くなることができない（これがかなりの事実を説明しているのも確かである）。しかし初対面でありながら、意気投合して距離がどんどん縮む場合がある。距離の均衡を維持するのではなく、その均衡を破るには、それだけの強い力が存在しているはずである。

心理的距離空間に作用する心理的力にはどのようなものが考えられるか。自他2極間の心理的距離が変化する場合、その変化の方向は自極から“近づく”、“遠のく”の相反する2方向しかない。したがってその変化をもたらす力も、「近づける力」と「遠ざける力」の2種となる。これらを一般的表現として「引力」と「斥力」としたい（その他に、変化を維持しようとする「慣性の力」などが存在するかもしれない）。

心理的距離における引力とは、社会心理学でいう「対人魅力」に相当すると思われる。ただしLewin流に解釈すると、魅力は「力」そのものではなく、「正の誘意性」である。Lewinのモデルでは、場（生活空間）の力は場の合力であるから、特定領域の誘意性のみが生活空間内

の移動の原動力とはならず、正の誘意性の方向に必ずしも向かわない。ただし本稿で扱う心理的距離は、自他を結ぶ線上での1次元移動であるから、誘意性の強さを力の強さとみなして問題ないと思われる。

では、心理的距離における引力と斥力は具体的にどのように作用するのか。心理的距離を構成する要素ごとに具体的に考えてみる。

3.1. 構成次元

心理的距離を構成する個別性と共同性の2次元は自己にとっての“他者の心理量”を意味する。すなわち他者は心理的に2次元であるため、力もこれら2次元においてそれぞれ作用すると考える。

a) 個別性における力

個別性における接近は、相手の情報量と情報強度の増大体験である。それは相手のその人であること（個別性）と存在感の増大である。その増大を導くのが引力ということになる。

それは「魅力」に相当する。魅力は何がしかの価値すなわち正の誘意価で、たとえば“美”という価値を具現している身体的魅力以外にも、“善”などの行為的価値などで接近が動機づけられることもある。これらの価値が誘意性をもつ心理学的理由は、主体に感性的・感情的・知性的に“快”を与えるためであろう。ただし魅力には、社会的に附与されている力もあり、社会的地位や既婚・未婚の差、職業などの社会的属性にも正負の価値の違いがある。

対する斥力は負の誘意価で、基本的には正の誘意価の対極が該当する。これらの力(誘意価)は他者の各属性に附与されるため、他者の個別性における力は、個々の属性に備わる正負の誘意価の合成であり、最終的な引力・斥力もそれらの合計値となろう。

快を与える対象には、情報の欲求、すなわち個別性次元での接近が喚起される。個別性での接近は、能動的には「相手をさらに知りたい」という気持ちが表現している。受動的には、相手からの接近による情報強度の増大への耐性が強まる。

b) 共同性における力

共同性における接近は、自己との一体化すなわち同一化方向への接近である。同一化の極は、距離0という自他融合状態であり、存在論的には「私が在ること」と同じ意味になることである。実際の接近の達成値は、自己と「共に在る」という最適な距離感を保った共在状態に落ち着く。

共同性における接近は、属性的に自己との共通性が多いほど容易と思われるが、「夫婦」のように性別や年齢差など変更不能な属性を越えることも可能である。すなわち、共同性を強める条件は、同属性ではなく、自己にとって受容可能かどうか重要であり、同属性は一般に受容しやすい傾向があるにすぎない。

従って、共同性における引力は自己の受容性である。受容したい・共に在りたいという動因と関係する。相手の属性的価値ではなく、相手と共に在る自己の快適性への希求である。いわゆる「単純接触効果」は、個別性的情報は増大しないものの、共に在ることへの受容の増大によって、より強く選択される現象とみなせる。

斥力は、非受容性すなわち違和感に由来する。違和感とは非自己性すなわち“他性”の顕現であり、自己と両立しがたい。それゆえ共に在ることの苦痛や嫌悪感（拒否感）を伴う。

「内集団ひいき」という現象がみられるように、社会的な異属性は、共同性において負の誘意性をもたらす。反目し合う集団の成員となればさらにそれが顕著となる。心理的距離尺度の

類いで最も古典的な E.Bogardus の「社会的距離尺度」は、アメリカにおける少数派集団に対する、生活空間内で“共に在る”ことへの許容度を測っている。

c) 個別性と共同性間のジレンマ

心理的距離の2次元性は、個別性の力と共同性による力が相矛盾する場合があります。たとえば、外見的には高魅力だが近づきたい人がいる。これは、自分が受け入れてもらう自信がない場合を意味し、自己との落差、馴染めなさを感じるからである。言い換えれば、自己との異他性が強く、共同性に乏しい。このように、高魅力の人は黙っていても人が近寄ってくるかというとはそうではなく、受容的な対応によって共同性次元の距離を縮めることが必要となる。

その逆に、近づかない方がいいと頭では分かっているのに魅かれてしまう相手もいる。たとえば負の誘意価による個別性の低評価に反して、共同性次元で受容してしまう場合で、相手の受動表出が接近的であることによって、相手の引力に引かれ、距離が縮まってしまう。

3.2. 体験次元

以上で論じた引力・斥力の行使がなされるのは2方向・2層の体験次元である。それらの力が行使される様子を、能動・受動の方向を基準に、その中での表象・表出層ごとに論じる。

a) 能動方向における力

表象層においては、個別性と共同性の力がいかに増大しているか、表出層においては、それらがいかに実現されているかを問題にする。

① 引力と斥力

能動方向における引力は、自己が距離の移動主体として、相手に「引かれる」(惹かれる)、相手に魅力を感じる、すなわち相手に附与される正の誘意価である。正の誘意価をもつ(引かれる)相手になぜ距離が接近するのか。誘意価とは、誘う力であるが、移動主体にとっては誘われる力である。これは欲求と行動の関係、すなわち“動因”の問題といえる。この動因の根源は、自己の住む世界を快適にしたいという、快の欲求に基づくものとみてよいであろう。異性間に作用する誘意性のように遺伝的にプログラミングされている場合もあるが、対人関係一般における心理的距離接近の誘意価は、個別性の「魅力」と共同性の「受容性」に分解できる。気に入った物は欲しくなり、愛する者とは共に暮らしたくなるように、魅力は選択を、受容性は“共に在ること”を導く。

一方、斥力は、幻滅・嫌悪の感情を伴う場合の典型である。距離をとる、すなわち相手の存在感(個別性)を小さくし、共同性を離れる。相手を完全に忘却することは不可能なので、表象そのものを控える。相手から離れることは、自他2極の2者関係においては、自己への退却、自己防衛を意味する。それゆえ、斥力は、相手への接近を忌避するだけでなく、相手からの接近も拒む。

② 表象層と表出層の関係

ズレという表象と表出の不一致を論じてきた従前のスタンスは、まず表象が自覚され、それを対面場面での表出にどこまで反映させるかというものであった。このスタンスが前提としているのは、心理的距離は意識で十全に自覚(表象)され、その後に表出されること、その際、表出は十分に制御可能であるということである。だが、その前提は脳科学や認知研究などで成り立たないことが明らかになりつつある(たとえば、Blood & Zatorre, 2001)。そもそも表情などの非言語行動(距離の表出行動)は、感情の自覚に先行し、また完全な制御は困難であるこ

とが示されている(Ekman & Friesen, 1975)。むしろ自覚的意識は、心的情報処理の再帰過程・再調整過程とみるべきであろう。

では表出の直接原因となる“距離感”はどのような過程で表出に盛り込まれるのか。それを説明するには、自覚的＝再帰的表象(re-presentation)の元となる無自覚過程としての“原表象”(presentation)を想定すべきであろう(内省不能で行動化される以前のものなので、客観的に確認されるまでは想定に止める)。そうすると、実際を表出は、原表象と再帰的表象の双方を反映する複合性をもつ。ただしその複合性は、表象的距離と表出行動との記号的対応関係が明らかになれば、精密な分析によって分離可能であろう。そうなれば、事後的にだが、表出から再帰的表象を反映する成分を除外した残余部分が原表象の成分とみなせる。

③ 表象の自己強化

表象を表象するという表象の再帰過程は、表出とは無関係に体験可能であることを意味する。その場合、現実の他者からの受動方向の再調整を受けないため、能動表象のみが繰り返され、既存の「力」が反復強化される。さらに相手を夢想して想いが強まる場合、能動表象に対応した受動表象をも夢想することで、ミゾのない理想状態が表象的に実現される。これによっても「力」が強化される。

非対面時の表象の場合、個別性は固定状態だが、共同性が変動しうるので、距離の方向は、共同性が任意に変化させられる。すなわち、表象による再帰的強化は、「いつも想っている」、「いつも私の傍らにいる」という近い距離感を実現する。これは充分に距離が近く、一体感を実現している他者に対して、対面での相互表出が不可能な事態になった場合、表象を強化することで、近い距離を維持するメカニズムともいえる。

逆に言えば、非対面時に表象によるこのような再帰的強化を受けない他者は、対面頻度が減れば次第に表象的距離が遠くなる。このように、表象活動によって非対面場面でも距離が変化しうる。

実はここで論じた非対面時の距離変化のメカニズムは、次章で取り上げる、対面時に発生する引力・斥力とは異なる第三の力による効果をネガティブ(陰画的)に表現している。ここでは、表出から独立した表象の変化の問題として扱った。

④ 表出

表出は距離の変化の表現化であり、力の行使そのものである。その力の所在は、本稿では表象だけでなく、むしろより直接的には“原表象”にあると想定した。たとえば能動的接近の表出として、視線を向ける、微笑む、声を掛ける、近寄る、触れる、抱きしめるなどがある。ただし個々の表出行動はそれ自体記号的に表象的距離と対応しているはずであり(それが表出行動の定義である)、それは社会的記号である以前に生得的信号でもある(すなわち伝達可能である)。

たとえば、空間的接近は情報量と情報強度の増大という個別性での接近であると同時に、空間的に“共に在る”という共同性での接近でもある。身体接触は、相手の情報強度の最大化であると同時に共同性でも最接近の信号・記号である。接近的表出の瞬間、接近は実現したことになるが、その直後に相手の受容／拒否というフィードバックが来る。その意味で新たな距離の能動表出は、自己にとっては距離のリアルな実現でありながら、関係としては提案段階にすぎない。

b) 受動方向

受動方向の引力とは、相手による距離の接近現象であり、相手が近づいてくる力である。す

なわち自己は誘意価の源であり、力を発する側である。この受動的引力を受けることは、自己は相手にとって価値があり、受容され、共に在ることが望まれていることを意味する。すなわち相手の接近・後退は、相手による自己への評価そのものである。自己は相手に価値づけ（価値踏み）されている。

① 接近

表出層における受動的接近は、視線を向けてくる、微笑んでくる、声を掛けてくる、近寄ってくる、触れてくる、抱きしめてくる、などで表現される。このような受動表出から信号的直観や記号的コードによって、個々の表出を根拠に、それらを集合して受動表象が推定される（ただしその推定式は、平均値か最頻値か最大値か最小値か、最近値かは個人差もあり不確かである）。すなわち、推定誤差が発生する。

相手が誰であろうと、接近されることは不快ではない。自己の誘意価が社会に充分機能していることの実証となるからである。受動的接近は自己評価を高める事ができる。先述した高魅力の例の自他を入れ替えていえば、自己の誘意価に自信がありながら、親密な関係が構築できないとすれば、共同性次元に問題があるということになる。

② 後退

受動的な斥力は、相手が離れていくという体験によって感じられる。近い距離だった場合、構造的均衡力により、ミゾを埋めようと能動的引力が強くなってしまいが、それは相手の斥力をさらに強くすることにしかない。

能動的引力を得ながら相手への接近が躊躇することがあるのは、その接近を拒否されることへの恐れがあるためである。その拒否は構造的均衡を破ることによるのではなく、自己の誘意価が乏しいことの現われという自己評価にかかわる体験であることは言うまでもない。

③ 距離の相互性

接近されることは、自他間の距離を相手側から縮める事であるから、結果的に自己側から接近することと実現される距離は同じになる。この事は自他を入れ替えても相互的に成立する。少なくとも一方の距離変化を他方が受容すればそれが自他間の距離となる。すなわち、能動・受動間で距離が一致するのは、偶然の事ではなく、むしろ一致する傾向にさえある。

この距離の相互性を、既述した構造的要因（ミゾの低減）や規範的要因（礼儀、間柄）ではなく、心理現象として認める場合の例として、受動的接近がそのまま能動的接近となる場合を論じる。たとえば相手の親しげな応対に、こちらも親密感を覚えることがある。こう感じるには、相手対して能動的斥力のない場合、固定した能動距離に執着していない場合であることが前提であるが、むしろ多くの他者に対して、われわれは受動的接近をそのまま受容しうる（ただし当該の“間柄”が許容する、馴れ馴れしくならない範囲内である）。近づかれることは、相手が自分と共に在ろうとしていることであり、自己の誘意価の実証を意味する。自己の存在が承認される快適な体験である。

この自他を置き換えれば、能動的接近が、相手にとってそのまま自他間の接近として体験されることを意味する。実際にカウンセラーの「無条件の関心・受容」の態度としてこれが応用されている。つまり、特定の支障がなければ、自他の心理的距離は、一方の表出によって規定される。距離の能動・受動の間は厳密には不一致でも、多くは許容範囲内に落ち着く傾向を内包している。

3.3. 動因

距離を変化させる力の能動側の源泉、すなわち距離を動かす原因は「動因」とみなせる。ここでいう動因とは、“必ずしも自覚的ではない、距離変化の心理的原因”という意味で用いる（“原表象”との関連が予想される）。では他者に接近する動因は何か。異性間にはまず本能的な性的動因がある。それ以外の関係では、乳児段階から発生しているこれも本能的な自己保存の動因が考えられる。すなわち他者の諸能力を借りることで、自己の生存価を高めるという動因である。しかもより生存価を高める能力のある他者であればさらに都合がよいため、他者に魅力の差が生じる。また、不安を感じれば親密性が増すという旧来の研究も、自己保存の動因が心理的距離を接近させるという本稿の文脈に吸収できる。

では、仮に自己の生存を可能にする機械群に囲まれていれば、他者に接近する動因は発生しないだろうか。自己の生存に貢献しない他者を求めることがあるとすれば、それは「孤独」に対する忌避ではないか（この動因は本能的かどうか不明）。もちろん孤独そのものが自己保存にとって望ましくない状態であることは否めないが、生物種によって（特に成熟した雄）は単独生活をする場合があるように、繁殖期以外の孤独状態は生物学的に不可能ではない。我々人類にとっては、“他者”は単に生殖や食糧の競争相手ではないことが問題となる。

その一方で斥力が発生するのはなぜか。なぜ他者の接近を拒むのか。これは、許容範囲を超えて近づきすぎた（許容範囲には文化差、個人差がある）他者から離れたいという場合であって、たいていは孤独回避の動因と矛盾しない。すなわち自我防衛の動因であって、自己保存の動因の一部である。

4. 共在の力

以上の他に心理的距離を変化させる力として、対面における空間的距離や時間の長さがある。これらは自他の心理的距離構造外の要因であり、物理的要因である。

4.1. 物理的要因

空間的距離や時間などの物理的要因も距離の変化をもたらす一因となる。ただし距離の空間的移動や対面する時間の長さそのものが心理的距離を変化させる力にエネルギー変換されるわけではない。それらが心理現象として心理的距離体験に一定の効果を示すのである。

a) 空間的接近の効果

自他間の空間的距離は、心理的距離という“距離感”体験の直接的な実感であり、心理的距離の表出（表現）であるだけでなく、その原因にもなっている。たとえば空間的接近は、個別性次元においては情報量（精細度）および情報強度の増大を意味する。情報量は相手の個別性（その人であること）を強め、強度は相手の存在感を強くする。空間的接近は、また（違和感が無ければ）、共同性も強める。なぜなら、空間的接近は、自己が在る“ここ”という同じ場所に“共に在る”という存在論的共在体験をもたらすからである。以上の効果から、空間的接近はまさに心理的距離の接近の表出行動として、最も基本的なものとなる。

逆に、空間的に離れていく事は、蓄積された情報量こそ減らないものの、情報強度を弱め、“ここ”に共に在る体験を与えなくなる。具体的には表出層での距離が拡がる。

b) 時間的持続の効果

自他が共に在る時間の長さが心理的距離にもたらすのは、個別性において情報を蓄積し、受容性（順応性）も高めることで、個別性・共同性双方において接近効果がある。すなわち心理的

距離は時間の関数でもある。共在の頻度や延べ時間が減ると、表出が減り、その影響で表象も減る。この心理的距離体験そのものの減少が、相手の存在感や共同性を減少させ、結局心理的距離を遠くさせる。

4.2. 共在力

以上をまとめて、共在（相手と空間・時間を共有して居ること）が心理的距離を変化させる力を「共在力」と名づける。この力は、共在することただそれだけで距離を近づける方向に作用する。ただし魅力のような自覚的な「引力」とは異なる力であり、単純接触効果や故郷への“愛着”と共通する、ほとんど自覚されない微量の力である。鉄道路線に対して、廃止が決まって始めて愛惜の情が湧く場合のように、関係が非線型の変化を迎えて始めて作動を実感する力なので、慣性力に相当するともいえる。

共在力は、その不在によって距離を遠ざける方向にも作用する。すなわち、空間的非共在すなわち不在の持続は、互いの表出の機会を無くし、やがて表象も途絶える。

むしろ共在力は、距離の変動より、その安定性に貢献する。その安定度を共在の「深さ」と表現したい。共在が深くなると、非共在が持続しても、表象的距離の後退がしにくくなる。

5. 動態の本質

5.1. 3つの力の関係

以上の考察によって、心理的距離を変化させる力には、大きく分けて、「構造的均衡の力」、「引力と斥力」、「共在力」の3種が見いだされた。これらの力は、いずれも心理的距離を構成する個性性と共同性にかかわるが、その動態は互いに異なり、それぞれ半ば独立して作用する。

均衡力は自他の関係としての調整作用であるが、引力・斥力は個人に帰属される。共在力は自他双方に作用するが、作用する力の度合いは異なる。

共在力は共在によってのみ強まるが、引力は非共在時にも強くなり、共在が長くなると逆に低下させる。

力の強さは、他者という距離対象にかかる力である引力・斥力が最も強く、次いで均衡力、もっとも弱いのが共在力であろう。すなわち、これらの力が相反する方向に作用する場合、距離を変化させる力は引力・斥力がもっとも顕著になる。引力がひじょうに強ければ、対面していない時でも表象の持続によって接近が続くが、引力がまったくなければ、非対面による共在力の不在が勝って、距離が遠のく。

均衡力が引力と反対方向にかかる場合、われわれはジレンマを体験する。しかし、相手の魅力がひじょうに強い場合など、引力は均衡力を突破できる力もちうる。引力が均衡力より弱い場合は、引力方向への表出が躊躇されて均衡力に従う。

共在力は自他双方に作用するため、均衡力の均衡水準を徐々に変化させることができる。初対面時より、ある程度知り合った状態に共在が進めば、そこで期待される均衡水準が接近側に移動し、それに即した表出が期待される。

また、均衡力と共在力は、自他関係のシステムに普遍的・固定的にかかる力であり、引力と斥力は自己の動因と他者の属性に依存するものであるため、個々の関係における心理的距離の変動は引力・斥力によるところが最も大きいであろう。

5.2. 心理的距離の本質

心理的距離の変動の主要因である引力と斥力が、孤独回避の動因と自己保存の動因とからなるとするならば、方向的に相反するこれらの動因は、他者の自己性と非自己性、それに対応する心理的距離としての個別性と共同性という、他者経験の2重性による本質的ジレンマを表現している。

他者は愛の対象となり、自己を孤独から解放してくれる。だが同時に過接近によって私の自己性（自己であること）を呑み込む脅威でもある。自己と他者のあるべき様態は、孤独を恐れて同一体として融合するものでもなく、自己への圧迫を恐れて孤立者として分離するものでもなく、その間（あいだ）の領域にこそある。その心理的距離空間は、引力と斥力という相矛盾する方向性を孕みつつ“共に在る”領域である。そして共に在るからこそ、自己は自己であり、他者は他者であるという、個別性と共同性が両立する。心理的距離空間は自己と他者の存在論的バッファ（緩衝帯）なのである。

このように心理的距離という現象を探求することで、対人関係の本質に迫ることが可能といえる。

引用文献

- Ekman, P., & W. Friesen, F. (1975). *Unmasking the Face*. Prentice-Hall, Inc., Englewood Cliffs.
(エクマン, P. & フリーゼン, W. 工藤力 (訳編) (1987). 表情分析入門－表情に隠された意味をさぐる－ 誠信書房)
- Blood, A.J. & Zatorre, R.J. (2001). Intensely pleasurable responses to music correlate with activity in brain regions implicated in reward and emotion. *PNAS*, vol. 98, no. 20, 11818–11823.
- Lewin, K. (1936). 原書名・出版社不明
(レヴィン, K. 外林大作・松村康平 (訳) (1942). *トポロジー心理学の原理* 生活社)
- Lewin, K. (1938). *The Conceptual Representation and the Measurement of Psychological Forces*. The Duke University Press.
(レヴィン, K. 上代 晃 (訳) (1956). *心理学的力の概念的表示と測定* 理想社)
- Lewin, K. Cartwright, D. (ed) (1951). *Field Theory in Social Science*. Harper & Brothers.
(レヴィン, K. カートライト, D. 編 猪股佐登留 (訳) (1962). *社会科学における場の理論* 誠信書房 増補版)
- 山根一郎 (2005). 私とあなたの心理的距離 青山社
- 山根一郎 (2012). 心理的距離はどのような距離か 椋山女学園大学人間関係学研究, 10, 55-65.